

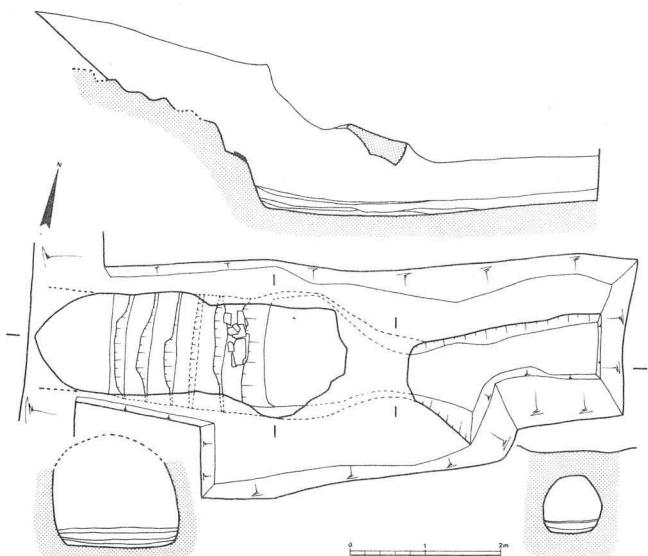
西念寺山瓦窯の調査

(昭和52年8月)

本遺跡は、西念寺境内墓地の擁壁造成工事に伴って発見された瓦窯跡である。今回の調査は、発見後応急の措置としておこなったため窯体の下端部分を検出したにとどまった。遺跡は甘檜丘からのびる小支丘の東斜面（標高105m前後）にあり、豊浦寺跡の南約200m、平吉遺跡の西約80mに位置している。

瓦窯は地山をくりぬいた全長5m以上の登り窯である。焼成部は地山を階段状に削り出した床面をもち、長さ2.2m、6段分を検出した。床面幅は1.5m前後、約30度の傾斜をもつ。焼成部下方は約60cmの落差をもって燃焼部底面に至る。燃焼部は長さ約1.4m、底面幅1.55mの規模をもち、底面に炭と灰の層が各3層堆積していた。焚口部分には天井が残存し、底面幅0.75m、高さ0.76mをはかる。焚口外方へは、平坦面が扇形に拡がるが、北に比して南への拡がりが大きいから、本瓦窯の南側にさらに1基以上の瓦窯が存在する可能性が大きい。

出土瓦には軒丸瓦・面戸瓦・熨斗瓦と多数の丸平瓦がある。軒丸瓦では素弁16弁蓮華文・単弁8弁蓮華文（山田寺C類）・複弁8弁蓮華文が各1点出土した。いずれも窯体から遊離して出土しており、本瓦窯で焼成したとは断定できない。平瓦では粘土板桶巻き造りが大半を占る。本瓦窯の性格と年代については不明な点が多く、今後関連の調査をまちたい。



瓦窯実測図 (1/100)